

身体表現において素材を媒体とすることの有効性
-音・身体・色を用いて表現する実践から-

Effectiveness of using "things" as media in body expression
- From the practice of expressing using sound, body, and color-

松永洋介¹・市原奨太郎²・小島莉緒³・沖田由香⁴・石湘鴻⁵・王坤鵬⁶

MATSUNAGA Yousuke, ICHIHARA Shotaro, KOJIMA Rio, OKITA Yuka, SHI Xianghong, WANG Kunpeng

1 問題の所在と研究の目的

表現は、心の中に生じたイメージを自分の外にアウトプットして表したものである。その際、媒体として、音、色や形、文字、身体表現などが用いられる。これらはそれぞれ音楽、絵画・彫塑・デザイン、詩・物語、ダンスなどと呼ばれ、芸術という分野を形づくっている。もちろん、これらはそれぞれに独立して存在するものではなく、例えばダンスには音楽はつきものであるし、音楽・文学・舞踊が一体となったバレエや、音楽・文学・美術が一体となったオペラ、歌舞伎などがある。

ところで欧米では学校で教えられる芸術科目は、音楽、美術⁷、演劇、舞踊の4分野が中心であるのに対して、日本では音楽と美術の2分野に過ぎない。演劇は脚本としての扱いが国語の一部で取り上げられるが、芸術としての扱いではない。また、舞踊は体育の一領域であるが、やはり芸術としての扱いとは言えない。

しかしながら、イメージを表現するとき、発達の未分化とされる低学年児童は、他の表現領域と合わせて行った方が効果的ではないかと考えられる。とはいえ、いきなり身体表現をするのは児童の中には抵抗のある場合も考えられる。そこで本研究では、児童が自らの音のイメージをどのように身体表現として表すのか、そしてその際に何を媒体として用いると表現しやすくなるのかについて考察することを目的とした。

2 研究の方法

研究方法は実践研究の方法をとる。

まず、授業を企画し、担当を分担する。次いで計画された授業を実際に小学校で実践し、得られた結果を分析する。授業はビデオで記録し、分析に用いた。また、個々の児童の意識を探るためにワークシートを用いた。なお、本実践においてビデオ録画は小学校からの許可を得ている。

今回は大学院教育学研究科芸術身体表現コースの選択科目「音楽教育実践研究」を履修した4名の学生を中心に附属小学校の担任教諭（音楽担当）を加えて実践を行った。

¹ 岐阜大学大学院教育学研究科

² 岐阜大学大学院教育学研究科美術領域院生

³ 岐阜大学大学院教育学研究科保健体育領域院生

⁴ 岐阜大学教育学部附属小学校教諭

⁵ 岐阜大学教育学部研究生

⁶ 岐阜大学教育学部研究生

⁷ 近年は Visual Arts（視覚芸術）と呼ばれることが多い。これは視覚によって認識できるような作品を制作する表現形式を指し、絵画・彫刻・版画・写真などが含まれるとされる。

3 研究の経過

(1) 授業の着想

この研究は大学院教育学研究科芸術身体表現コースの選択科目「音楽教育実践研究」の中で行われた。

この授業の目標は、小学校における音楽科の授業において授業実践を行うための教材分析力、授業対応力、授業分析力を養うことである。また、小学校の専修免許を取得することを希望する大学院生であるため、音楽科だけでなく他の専攻領域の院生をも受講対象としている。

今回は美術と体育を専攻する院生が受講したため、表現の原理から教科間の関連までを講義したのち、芸術科としての授業プランを考えることにした。なお、院生は2名とも学部卒業時に小学校教員免許を取得しているので、実際に学校で授業を実践することが可能である。

(2) 音の選択

芸術の授業とは言え、本授業は基本的には音楽科として位置付けているので、まず音楽を中核におくことにした。音楽と美術や体育との関連について検討した結果、既成の楽曲を用いずに、環境音を用いることにした。その理由は、何かにとらわれずに先入観なくイメージして表現してほしいと考えたからである。また、日頃何気なく聞いている音を改めて音楽として聴くことによって、普段生活している身の回りにも音楽があるということ気付いてほしいからである。

環境音については、平成29年に告示された中学校学習指導要領においても「適宜、自然音や環境音などについても取り扱い、音環境への関心を高めることができるよう指導を工夫する」⁸とあるように、音や音楽が生活や社会との関わりを実感できるようにすることが意図されている。これは平成20年告示の同指導要領から引き継がれているものである。一方、小学校音楽科の学習指導要領には、自然音や環境音についての言及はないが、教科書では環境音を扱っているものがある。それは4年生の教科書で、表紙の次に「自然と音」というテーマで風の音を扱っている。これは、目次上は題材の中に配置されず、「音楽プリズム」というトピック的な扱いではあるが、「しずかな風、はげしくふく風… さわやかな風、つめたい風… みなさんには風の音がどのように聞こえますか」という投げかけとともに風の吹く様子を示す写真が5枚掲載されている⁹。このような状況としては、実際にどの程度授業の中で扱われているかは不明であるが、生活科では、学年の目標の中に「主に自分と自然とのかかわりに関するもの」があり¹⁰、その中で自然音や環境音に気づく機会も多いと考えられる。

そこでどのような自然音や環境音を扱うかについて検討した結果、今回はASMRを取り上げることにした。ASMRとは、Autonomous Sensory Meridian Responseの頭文字をとって名付けられたものである。「(音楽ではない)音・視覚全般から得られる心地よさ」を扱うジャンルとされ、2010年2月に、ニューヨーク州在住女性のジェニファー・アレン(Jennifer Allen)によって「ASMR」という言葉が生み出され、2011年ごろから英語圏での「ASMR」の使用が増加したといわれている¹¹。Youtube上では様々な音源がアップロードされている。また、それぞれの音源の時間が長いのも特徴で、収録時間が1時間以上のものがほとんどである。中には8時間以上のももある。ただ、授業で使用する際にはYoutubeからダウンロードしたものをそのまま用いるには時間が長すぎたので、授業用に1分以内に編集した。用いた音は、小学校のグループに合わせて、「洗濯機の音」「沸騰音」「目玉焼きをつくる音」「雨音」「電車の音」「波の音」の6つとした。このうち「洗濯機の音」と「目玉焼きをつくる音」は適した音源がなく、

⁸ 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』教育芸術社、p.99

⁹ 小原光一ほか(2015)『小学生の音楽4』教育芸術社、p.2

¹⁰ 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編』東洋館出版社、p.12

¹¹ 「ASMR」<https://dic.nicovideo.jp/a/asmr> (2019.11.25アクセス)

小島が自分で録音し編集した。

(3) 素材の検討

身体表現するには、何も持たないで動くよりも何か素材を使う方が動きやすいのではないかと考えた。なぜならば直接身体を動かすことについて方法が分からなかったり、恥ずかしさを感じたりすることが考えられるからである。このことについて高倉は、児童の感じたことを表現させるためにスカーフを用いた実践を行っている¹²。そこで、スカーフ、ボール、プールスティック、スズランテープの4種類を選び、さらにそれぞれ複数の色を準備した。媒体や色を複数準備したのは、児童のイメージに近いものを選ぶことを期待したからである。

4 実践の概要

実践は岐阜大学附属小学校2年生を対象に、2019年12月9日に行った。場所は多目的室である。この部屋は机や椅子がなく、普通教室の約2倍の広さがあり、身体表現をしやすい環境である。授業時間は1時限(45分)である。授業は、小島と市原がティームティーチングを組んで行った。また、沖田は担任であることから、グループ活動の際に適宜指導を行った。また、記録として石と王がそれぞれビデオで録画を行った。

(1) 指導の過程

指導の過程を次に示す。

① 児童に音を聴かせ、指導者がその音に合わせて身体表現をする。

最初に、小島が児童にバスケットボールを示し、ボールを落としてその動きを示範してみせた。次いで、ボールを強く落としたり弱く落としたりして、体をその動きに合わせて動いてみせた。

今度は児童にもボールの動きを模倣するように指示し、試行させた。

ここで小島が「ホントの動きをみて真似っこした？それとも、音を聞いて真似っこした？」と問いかけた。これに対して児童から「動き」「音」と両方の返答があった。

② 身体表現をするための素材を示す。

スカーフ、ボール、スズランテープ、プールスティックの4種類を提示し、動きのイメージの際に使えることを知らせた。

また、例示としてスカーフを用いて身体とともに動くことができることを提示した。

③ 音を聴いて身体表現することを知らせる。(G:グループ)

あらかじめiPadにグループごとに違う音を入れておき、取りに来た順に手渡す。今回は、1Gは洗濯機の音、2Gは沸騰音、3Gは目玉焼きをつくる音、4Gは雨音、5Gは電車の音、6Gは波の音となった。



写真1 スカーフを用いた表現

¹² 高倉弘光(2017)『こども・からだ・おんがく 高倉先生の授業研究ノート』音楽之友社、p.110

④ グループごとに音を聴いて身体表現する

それぞれの音が入った音を聴いた児童たちのグループの中には、最初、その音を模倣しようとする行動がみられた。例えば、プールスティックを指でこすって風の音を表現しようとしていた。しかし、スピーカーから聴こえてくる音と自分たちがつくりだす音とのギャップに活動が停滞した。

⑤ 途中でグループ表現の一部を紹介する

児童に表現の可能性の一つの例を示すために抽出グループの紹介を行う場を設けた。

⑥ グループごとに音を聴いて身体表現する。

6Gの紹介後、再びグループ活動に戻した。

⑦ グループごとに全員の前で発表する。

全員を集め、1Gから順に発表を行った。最初の3グループは発表後に、他のグループの児童から感想を聞く場を設けたが、全グループに適用すると時間内に終わられなくなることが現実となったため、4G以降は発表だけにした。

全グループが発表し終えた時点でちょうど時間となり、授業を終えた。

⑧ ワークシートに自分の意図や感想を書く。

各グループの表現意図や用いた素材に対する意識を探るため、ワークシートを準備した。しかし45分の時間内に書く余裕がなかったので、教室へ戻って記入した。指導には沖田が当たった。

(2) 各グループの表現について

活動当初は半数以上のグループが、音を模倣して再現しようとしていた。そのためプールスティックにスズランテープや指先をなどでこすりつけて音を出そうと試みていた。しかし、なかなか思い通りの音が出せないことに困惑していた。

指導の目標は、音から得たイメージを、身体表現で表すことであった。そのための補助として4種類の素材を準備した。児童が、計画段階では予想もしなかった使い方をしたため、教材としての新たな可能性を感じたが、ここは身体表現と結びつけるために、軌道修正を図った。これは計画段階では予定していなかったことである。

まず、児童を全員集合させ、ねらいに沿った動きをしているグループの表現を紹介する場を設定した。紹介したのは6Gである。このグループは、「波の音」を表現しようとしていた。そのために音に合わせて身体を横に大きく動かしたり、スカーフを投げたりしていた。

次いで、指導者が次のように補足説明をした。

「今いろんな音を聞いたよね、グループでそれぞれ音を聞いたと思います。その音を再現、真似っこした音を道具を使って出すんじゃなくて、音を聞いてさっき、おっきい音の時に大きいジャンプ、ちっさい音の時にジャンプしたよね。そういう感じに体とモノを使って音ってどんな音かなって表現してほしいんだけど出来そうかな。例えば、ぐおーってゆれてみたりだとか、転がってみたりだとか、バーン、バーンってやってみたりだとか、そういうのをモノとか自分の手、足を使って表現できそうかな」

つまり、音を模倣してつくるのではなく、音のイメージを身体で表現すること、そしてその際に必要であれば4種類の道具の中から選んで使ってもよいことをこの場で再確認した。その後再度グループ活動を進めるように指示した。

この発表を契機として、他のグループもどのように活動をすすめればよいか分かったようであった。以下に各グループに割り当てられた音と表現の概要を記す。

i) 1G 洗濯機の音

全員スカーフを用いて、回転したりスカーフを投げたりした。

ii) 2G 沸騰音

女子は、一つのスカーフを二人で持ち、真ん中でテープをしばり、それを一人が持ってねじった。男子は、プールスティックにビニールをまきつけてこすり、音を再現した。

iii)3G 目玉焼きをつくる音

導入で使ったバスケットボールを使い、目玉焼きができる様子を音で表現しようとした。特に水を入れたときの変化を表現しようとした。

iv)4G 雨音

真ん中でボールを投げ、その周りをスズランテープをもった女の子が手を振りながら回っていた。その際、赤いボール2つ、青と白のボール1つずつを用いた。また、カラフルなスズランテープを使った。

v)5G 電車の音

一人が緑のスカーフをもって風を表現し、他の児童は、身体(足)を使ってガタン、ゴトンの音に合わせて動きをつくっていた。その際に手でリズムをとりながら、スズランテープを握っていた。

vi)6G 波の音

波のような音から、海を連想し、海から「スカーフを3まいつかってあかるいうみ、ふつうのうみ、くらいうみをつくりました。そこがくふうしたことです」と児童が説明するように、スカーフの色も工夫して、表現に組み込んでいた。また、ピンクの色のスカーフは、サンゴを表しているということも児童から聞くことができた。

5 アンケート分析

授業終了後、児童の取り組みについてのアンケートを行った。アンケートは次の4項目からなる。

- (1) 「音をきいて、からだで表してみよう」をやってみてどうでしたか。
- (2) どんな道具を使いましたか(複数回答可)
- (3) 面白かったところ、がんばったこと、工夫したこと
- (4) むずかしかったところ、もっとやりたかったところ

以下、各項目について述べる。

- (1) 「音をきいて、からだで表してみよう」をやってみてどうでしたか、について
楽しかった、ふつう、むずかしい、の三択法で行った。

「楽しかった」18名(54.5%)、「ふつう」4名(12.1%)、「むずかしい」11名(33.3%)であった。

クラスの半数以上は「楽しかった」と回答したが、約3分の1の児童は「むずかしい」と回答したことが明らかになった。

- (2) どんな道具を使いましたか(複数回答可)

使用した4種類の道具を記入させたが、「足」と回答した児童が2名いた。

結果としては、スカーフ19名、ボール6名、スズランテープ12名、プールスティック2名、足2名となった。

クラスの半数以上はスカーフを用いたが、中間発表まではほとんど用いていなかった。このことは、中間発表によって具体的な音を模倣するのではなく、様子を表現することを理解したためであると考えられる。

- (3) (1)と(2)のクロス分析

楽しさと使った道具との関連を調べるため、両方の問いについてクロス分析を行った。その結果を次に示す(表1)。

4種類の道具の中で最も多く選択されたのはスカーフであり、「楽しかった」と回答した児童24名中2分の1が用いていた。しかしながら難しかったと回答した児童も5名おり、「難しかった」と回答した児童の中では最も多かった。

次いで多く選択されたのはスズランテープで7名であった。一方これを「難しかった」とした児童も4名おり、スカーフに次ぐ多さであった。

ボールとプールスティックを選択した児童は少なく、それぞれ6名と2名であった。

以上のことから、スカーフとスズランテープは、「楽しかった」と回答した児童も、「難しかった」と回答した児童も選択していたことが明らかになった。

表1 楽しさと選択した「もの」との関係

	楽しかった	ふつう	難しかった	合計
スカーフ	12	2	5	19
ボール	3	1	2	6
スズランテープ	7	1	4	12
プールスティック	1	1	0	2
足	1	0	1	2
合計	24	5	12	

このことはこれら2つの素材の特性によるものと考えられる。スカーフもスズランテープも比較的軽く、空気抵抗が少ないため滞空時間が長い。一方、ボールとプールスティックは手を離すとすぐに落下する。今回準備した音は、「洗濯機の声」「沸騰音」「目玉焼きをつくる音」「雨音」「電車の音」「波の音」であり、重さを感じるものは「電車の音」のみである。「洗濯機の声」は水の中で回転する洗濯物というイメージがある。また「沸騰音」は水が沸き立つ音とともに水蒸気が昇るイメージがある。「波の音」と合わせて空間で移動するイメージが生じる。

この移動するイメージ、つまり軽さと「ふわっとした感じ」が児童を引き付けたのではないかとということが考えられる。しかし同じ素材を選んだとしても、操作性の点で扱いやすく感じた児童が「楽しかった」と回答し、扱いにくいと感じた児童が「難しかった」と回答したと予想される。

実際、アンケート項目の「(3) 面白かったところ、がんばったこと、工夫したこと」と「(4) むずかしかったところ、もっとやりたかったところ」には、次のような記述があった。なお、児童の記述はかな書きが多かったが、本論文では読みやすくするために漢字で示す。

(4) 「(3) 面白かったところ、がんばったこと、工夫したこと」について

面白さと、頑張ったことや工夫したことは質が異なるので、分けて分類した。

A. 「面白さ」について

まず「面白さ」に関する記述としては次のものがあつた。

- ① ちょっと難しかったけれど、使ってみていろいろな音を使って楽しかったです。
- ② ②いろいろな音があつてそれをどうやって表すかが面白かつた。
- ③ 使っているものは全然違うのに、音に合わせて同じものようになって面白かつた。
- ④ ④ものや体でやるとすごく楽しかつた。
- ⑤スズランテープをざらざらすると面白い音が出たこと。

B. 「がんばったこと、工夫したこと」について

- ①ちゃんとその音といっしょのような海の感じができました。
- ②スカーフを3枚使つて明るい海、普通の海、暗い海を作りました。そこが工夫したことです。
- ③音が海みたいだからなめらかな動きをした。
- ④スカーフがひらひら動くので「水っぽいな」とひらひらのところを工夫しました。
- ⑤工夫したことは、スカーフの振り方です。水がズドドと流れているみたいだから少し振つて下から上、下から上に繰り返して水が落ちているみたいにやりました。
- ⑥思ったとおりに、ボールが泡みたいになつた。

- ⑦ボールを泡みたいに見せるために、青と白のものをつかった。
- ⑧音に合わせて、上や下、下や上に振って、中火、小火、大火というふうに音に合わせるのをがんばりました。(スズランテープ)
- ⑨使っているものは、全然違うのに音に合わせて同じものようになって面白かった。
- ⑩いろいろな音があってそれをどうやって表すかが面白かった。

まず「面白さ」について検討すると、「使っているいろいろな音を使って楽しかった (①)」や「いろいろな音があってそれをどうやって表すかが面白かった (②)」「スズランテープをざらざらすると面白い音が出たこと (⑤)」のように素材を扱うことに楽しさを感じていたことがうかがえる。

次に、「がんばったこと、工夫したこと」について見ると、「スカーフを3枚使って明るい海、普通の海、暗い海を作りました。(②)」「スカーフがひらひら動くので「水っぽいな」とひらひらのところを工夫しました (④)」「ボールを泡みたいに見せるために、青と白のものをつかった (⑦)」のように素材を自由に操る操作性にひきつけられていることがうかがえる。

特にスカーフとスズランテープの操作性が、今回の音源にうまく合致したと考えられる。

(5) 「(4) むずかしかったところ、もっとやりたかったところ」について

一方、難しかったことについての記述は次のようであった。

- ①音をきいて様子を表現するものを選ぶのが難しかった。
- ②なめらかだから、スカーフにしてどう使うかが一番難しかったけどめっちゃくちゃ楽しかったです
- ③音に合わせてところが難しかった。
- ④ スカーフをいっぱいつけるのが難しかった。
- ⑤ どうやってやるといいのか難しかった。
- ⑥振って下から上を繰り返しているうちに、手や腕がだんだん疲れてきて、大きく下から上にするのが難しかった。
- ⑦ もう少し結んでもっと丈夫にしたかった。
- ⑧ スカーフを3枚重ねてそのスカーフを投げてキャッチすること。
- ⑨ 様子を思い浮かべながら、海がどうやって流れているのかを思い浮かべることが難しかった。
- ⑩ 前へ波が行くところがどうすればいいのか難しかった。
- ⑪ 風みたいにするのが難しかった。
- ⑫ 音を考えるところ。
- ⑬ 音に合わせて「大きく」「小さく」を考えるのが難しかった。

まず、児童が「音をきいて様子を表現するものを選ぶのが難しかった (①)」というように、自分のイメージに合うものを選択することに迷ったり、「スカーフにしてどう使うかが一番難しかった (②)」のように操作性に困難さを感じたりしている様子がうかがえた。

これらの記述から、素材の選択と素材の操作の2つのことが児童に困難を感じさせていると考えられる。しかし、例えば②のように、「難しかった」と感じた児童のなかにも、「楽しかった」との記述も見られることから、素材を操作する困難さがそのまま回答に繋がっているとは限らない。その意味では記述だけでなく、実際の活動からも声を拾い上げる必要があるだろう。

また、今回は「(4) むずかしかったところ、もっとやりたかったところ」というように、活動を振り返って考える設問と、今後の展望を問う設問を混在させたために、難しさよりも今後の展望のことを書いている児童も少なくなかった。例えば次のような記述である。

- ① もっと体を使って動きをつくってみたいです。

- ② もっとやりたかったことは、もっといろいろな動きや音をたてたりしたこと。
- ③ どの音かあてることがやりたかった。
- ④ もうちょっと元気な音で、たくさん動きたかった。
- ⑤ 違う音も、どうやって合わせるかがやりたかった。
- ⑥ 動きを合わせたかった。

これらの記述からは、児童の中では音と素材がようやく関連しあって身体表現へと結びつく段階まで達してきていると考えられた。

6 考察と今後の課題

今回の実践では、音源を聴いてその情景をイメージし、身体表現で表すことを意図していた。しかしイメージを醸成して身体表現につなげていくためにはいくつかの条件があることが明らかになった。

一つは、児童が素材を扱うにはそれに習熟する時間が必要であるということである。活動当初、児童は音源の音を再現するために素材を選び音にしようとした。しかしながら音をきいて頭の中にイメージし、それを身体表現するには少し時間が不足していた。児童は身体表現する前に素材との対話を行っていたからである。つまり、それぞれの素材の特性をある程度知らなければイメージと合わせることは難しいということである。このことは、音楽の授業、特に音楽づくりや器楽合奏において楽器を扱う際に、まず楽器への興味を充足させなければ次のステップに進めないことにもつながる。そのためには授業時間の確保が必要である。

もう一つは児童に適した音源の選択である。今回は音源のカテゴリーが2つになった。例えば、準備した音源のうち、「洗濯機の音」と「目玉焼きをつくる音」にはストーリーがあり、時間の経過とともに音が変化していく。「沸騰音」と「電車の音」も前述の2つほどではないにせよ、始まりの段階と終りの段階がある。一方、「雨音」と「波の音」はほとんど同じ音が持続するため、雨と波の音以外は聞こえない。つまりストーリー性の有無によって音源から身体表現までのつながりに差ができる可能性があることが考えられた。特に低学年児童の場合には具体的で、かつ経験したことがある（聴いた経験がある）音源を選択することが必要であろう。

第三に、授業方法としての課題提示の在り方も課題となる。

この点について授業者の市原は「改善として、活動において順序立てて行う必要があったと感じる。それに伴い、課題ももっと分かりやすく出来たと思う」と指摘している。特に今回は低学年児童を対象としたため、音源提示、素材提示、身体表現へのステップについて、スモールステップを用いながら行っていく必要がある。

第四に、素材の選択については児童の操作性との関係を検討する必要がある。今回はプールスティックを使用した児童が途中からほとんどいなくなった。この原因について小島は、プールスティックのサイズ感や扱いにくさを挙げている。また、スカーフやスズランテープがよくつかわれた理由として、子どもの扱いやすいサイズであること、イメージに合う動きを表現できることを挙げている。さらに提示の仕方について「ものの紹介だけに済ませず、使い方の例などをもっと紹介することで、こんな風にも使えるのかもしれないというように新たな発想が生まれるのではないかと考える」と述べている。

今回の研究の目的とは別に、教員養成大学の授業として、授業をした学生が前述のような気づきを得たことは、教員としての力量形成に有効であったとも言える。

なお、今回の実践では選択した素材と色との関係を十分観察することができなかった。この点については以降の実践の際の課題としたい。

【参考文献】

ASMR <https://dic.nicovideo.jp/a/asmr>

【参考音源】 いずれも 2019 年 12 月 1 日アクセス確認。

電車 (<https://www.youtube.com/watch?v=TA4mhuFF-Go>)

ベーコンを焼く音 (https://www.youtube.com/watch?v=e-5GirZe_jY)

傘の下の雨音 (https://www.youtube.com/watch?v=IFGS_NVsYGk)

踏切と電車 (<https://www.youtube.com/watch?v=Zv5nSUJEwPs>)

砂浜の音 (https://www.youtube.com/watch?v=Rtt0u_dioi8)